カトリックさいたま教区サポートセンター
ボランティア活動報告⑦

第２４チーム・２０１１年9月８日（木）～9月１３日（火）

■湯本サポートステーション（福島県いわき市）

（信徒女性１名、シスター１名、神学生１名、助祭２名、信徒男性１名取材、計５名）

木曜日は久ノ浜へ視察。2，3 か月前と違って業者による瓦礫の片づけがだいぶ進んでいて少しきれいになっていた。小学校グラウンド隣に建設されたばかりの「浜風商店街」を見学した。その中には地震や津波で流された状況の写真が展示されていた。

金曜日午前中は 2 グループに分かれ、1 グループは仮設住宅へ取材の手伝いに、もう１グループはステーションでミーティングを行った。取材班は以前訪問した家族を訪れて挨拶。お元気そうだったが、最近足が弱くなり、立っているのに精いっぱいの様子だった。午後 2 時からはいわき教会の傾聴グループ「みみ」と打ち合わせ後、一緒になって３つのグループに分かれ、いわき教会の信徒の方が手作りした七草を持って訪問しながら渡した。年配者は非常に喜んでくれた。

土曜日朝 8 時から、湯本教会にたくさんあった麺類を一袋ずつ仕分けて、仮設住宅に持っていく準備の作業をした。午前 9 時半には、まだ訪問に行ったことのない新しい仮設住宅に行った。その仮設の方々の多くは、原発 20 ㎞圏内に住んでいたため、住まいを移らざるをえなかったとの話を聞いた。仮設の狭さに不満を持つ方もいた。

震災後半年後の 9 月 11 日(日)は、湯本教会でミサがチェスワス神父によって行われた。ミサ・昼食の後で、10 月 9 日に行われる川口教会のベトナム人による炊き出しの打ち合わせをした。午後 3 時からは昨日の傾聴訪問の続き。やはり原発問題で仮設に移ることになった方々は、家はあるのに帰るに帰れないもどかしい思いでいっぱいのようだった。

避難所のある中央台高久では、子供達が竹に絵を書いて日本のかたちに並べた。竹の中のろうそくには火が灯され、仮設の方達が集まって共に鎮魂の祈りを捧げた。避難所の方達と一緒に中秋の名月も観た。

子どもたちが絵付けした竹の灯篭

月曜日の朝、小名浜教会へ寄り、山積みされた物資の中から食料を探して袋に包み、先日から訪れている仮設住宅の地区へ向かう。この区域の仮設の住民は、原発問題で避難されている同地区出身者が多く、会話に困らない様子だった。午後 5 時には取材チームと共に現在も避難所となっている旅館へ向かい、そこに避難されている方々とお話した。津波で家を失くされた方、また、原発近くに住んでいるため、避難しなければならない人たちは 10 月いっぱいで新しい仮設に移ることになっているそうだ。

第２５チーム・２０１１年９月15日（木）～9月20日（火）

■湯本サポートステーション（福島県いわき市）

今週の派遣は人数が集まらなかったため、やむをえず派遣はキャンセルとなった。

第２６チーム・２０１１年９月22日（木）～9月27日（火）

■湯本サポートステーション（福島県いわき市）

（信徒男女各１名、シスター１名、司祭１名、計４名）

木曜日、教区事務所でオリエンテーション後、湯本ステーションへ向けて出発。本日は初日ということもあり、明日以降に傾聴で伺う予定の中央台高久の仮設住宅を視察。あいにくの雨ということもあり、車から降りての視察はできなかった。また、海岸沿い被災地の現状視察も本日は見送ることに。派遣期間中、天候の良い時にタイミングを見て視察に行くこととなった。

金曜日の朝、今回の派遣チームに参加していた司祭により、湯本ステーションで朝ミサにあずかる事ができた。

朝食後、被災地を視察。小名浜港をはじめ、港の瓦礫の撤去は済んでいたが、建物の解体などは手つかずのものもあった。また、瓦礫類は海岸沿いの一定の場所を仮置き場とされてまとめて置かれているのを見かけたが、それをさらに最終処理をするまでには時間を要するのではと感じる。久ノ浜町の視察では、瓦礫撤去はほぼ済んでいるが、今でも津波による爪痕の大きさが想像できるほどの悲惨さが感じられる。この日はお彼岸ということもあってか、建物の跡地を訪れ、手を合わせる人々を多く見かけた。

午後、中央台仮設住宅での傾聴を開始。いわき教会にて信徒の方々と合流し、訪問宅のリストアップをして４グループに分かれて訪問する。訪問した中には快く受け入れてくださる方もおられれば、逆にボランティアとはいえ、訪問は迷惑という方もおられた。独居の方もおり、そういった方々はボランティアと話をすることで気分が楽になるという方も多くいるという印象。仮設住宅はある程度、地域ごとにまとまってコミュニティを形成しているようだが、近くにスーパーがないため、買い物に不便を感じている独居高齢者が多くいる。これは大きな課題。また郵便ポストの設置を求める声も複数あった。

土曜日は、昨日に引き続き、同じ区画の仮設住宅を２グループに分かれて訪問した。今日訪れたお宅には子どものいる若い世帯もあれば、高齢の夫婦２人暮らしの世帯もあり、さまざまであった。スロープのついている仮設住宅もあり、そこには体になんらかの不自由を抱えている方も住んでいた。こうした方々にとっては、通常避難している方より過酷な生活になっているのでは、と感じる。ある方からは震災当日の話や夜中に原発からの爆発音を聞いたという話を聴いた。持つ物も持たずに避難せざるを得なかったと言う。爆発については我々はニュースでの報道で大分後になって知ったが、近くに住む方々にとっては正確な報道もないままに避難せざるを得なかったことを想像すると、当時の不安な心境は我々では測り知れないものと考える。

日曜日、ミサ及び湯本の信者さんと茶会。自己紹介をして分かち合いをした。午後の傾聴の予定を考えすぎ、パタパタとしてしまったことから、あまり交流できなかったことを反省。小名浜教会を訪れ、見学させて頂く。とても素敵な教会で感激した。昼食後、仮設住宅へ。震災当時の話から、目に見えない放射能の恐怖、転々とさせられる避難所の生活の話など 30 分以上話をされる方もいた。また色々なところで「ボランティアの方々にはお世話になっています」と涙を浮かべて話をするご婦人もおられた。「傾聴」と文字で書くと２文字で終わってしまうが、その難しさを感じた一日だった。

月曜日、昨日訪問しきれなかった方のもとを訪れる。1歳の娘さんを連れながら避難所を 5～6 か所転々として、この仮設に引っ越してきたという母親もいた。震災そして原発の問題…と次々に降りかかる災難に心折れそうになったこともあったが、1 歳の娘の笑顔に助けられたと話してくれた。その言葉を聞いた時、正直返答に困った。

午後、新しいニーズを掘り起こすということで別の地区をまわることにした。一番新しい仮設住宅ということもあり、道路から自宅玄関前まで舗装されており、他の地区との違いを感じた。何日か前に「隣の地区だけ舗装されている」という不満を聴いたが、同じ仮設の立ち並ぶ地区で住まいに格差的なものを設けるのは好ましくないと思った。ただでさえ、皆が同じように避難生活でストレスを抱えているのだから、新たにストレスを生み出すような対応はすべきでないのではと思う。余計なストレスを感じないで住めるよう、国および行政の真摯な対応を願ってやまない。

朝ミサの様子

ボランティア派遣窓口からのお知らせ

※現在、ボランティア派遣担当者の引き継ぎを行っています。これからは川田と木戸に代わって、薄葉、松田、古澤が担当となります。